

月の花挽歌 ～10. ^{がつざん}月山～

10. ^{がつざん}月山

10- 1

大御所俳優Tの陰しさを増していく表情の裏側をいち早く酌み取った令子は、真紀に目配せしてから横田に訊ねた。

「失礼ですが、横田先生は、何を仰られたいのでしょうか？皆さんにはどう伝わっているのか……。お友達が「君の瞳に乾杯」と言われたことに、ホザクなどと乱暴な言葉遣いをされましたが、その訳をお聞かせくさいませんか？」

微笑む玲子の口調は淡々としているが、どこかに冷徹さを潜ませている。

「私としたことが……。申し訳ない。ご存知かと思いますが、ハンフリー・ボガードが映画『カサブランカ』の中で言った名台詞“君の瞳に乾杯”を引用して悪ふざけをした男のことなんです」と横田は探していた色を忘れた頃に偶然見つけられた時に似た感懐を持って答えた。

「もう一つお聞きしてもかまいませんか？」

「私に分かることでしたら」と横田は湿り気を帯びた声で言った。

「ハンフリー・ボガードの名台詞を乱入させて、いささか迷惑をかけることになったのは横田先生のお戯れですか……。そういうことなのですね？」と令子は訊いて、眼の底で微笑んだ。

「戯れなんかではありません。数日前に皆さんが、今、座っている同じ席での話です」と横田は顔を僅かに歪めて言った。

「君にはまだよくわかっていないようだ」とTは横田を射るような目で見てから、真紀に何とかしないかという微妙な表情を向けた。

乱酔の中で、横田は目覚めようともがいていた。真摯であろうとしようとするほどに朦朧が立ち現れた。

気がつけば、長身の人気男優は真紀の隣に移動していて、さり気なく口説いている。

「すみません。すみません。あの、すみません！」と横田は令子やTに真面な対応ができたかどうか頭片隅へ追いやって、長身の人気男優に向かって、闇雲に連呼していた。

脱ぎっぷりのいい女優に、そのことを示唆された人気男優は、横田を邪魔くさそうに一瞥したが、仕事柄、多彩な芸術家たちと交流の際に厄介な酩酊状態と付き合い合わせてきたこともあり、無難にやり過ごすための顔を作ることができた。まるで中国の伝統芸能の仮面劇のようにして。

月の花挽歌 ～10. 月山^{がつざん}～

10-2

画家は男優の作為を見逃さなかった。

画家はある映画監督から、主役のスターはうすのろの美男子の方が扱いやすいと聞いたことがある。

しかし、目の前にいるスターは凛と見える端正さの裏に火傷しそうな炎のない熾火があることまでも、横田は深酔いしているにも拘らず飛び抜けたセンサーで感知していた。

「いきなりこんなことをお聞きするのもなんですが、もし、『カサブランカ』の企画が持ち上がった時代にあなたが存在していたとして、主役のオファーがあったとしたら、どうしますか？」と人気男優を買いかぶってしまった横田は、“君の瞳に乾杯”との辻褄を合わせるためには妙案だと勝手に自得して、はた迷惑も顧みずに勢いで訊いていた。

同席している誰もが気づかない手際で、人気男優から二の腕を弄られていた真紀は、Tからの横田に対するプレッシャーも重なり、思いきって口を開いた。「こんなに酔ってらっしゃる横田さんを見るのは初めてです。タクシーを呼びましょうか？」

「ママ、話の途中で何を言ってるんだ！失礼じゃないか！」と横田は声を荒げて言った。

「ボギーが演じたキザ男ですか？」と退屈と思いながら話を聞くともなしに聞いていた人気男優は、他者には感づかれぬ素振りで真紀の二の腕を摩りながら、その場を取り成すように言った。

「ボギー、……」と横田は不審顔で訊いた。

「私が子供の頃に流行っていた沢田研二が歌った『カサブランカ・ダンディ』って曲はご存じないですか？」と人気男優は尋ねた。

「この先生はね、さっきから無理して話に加わろうとしているんだ。ほら、言っていることがうすぼんやりしているだろう」とTは皆に同意を促すように視線を巡らせて言った。

横田は怒りを鎮めるために残っていたシャンパンを飲み干すと、お代わりを求めた。

「歌のさわりですが……」と人気男優は横田の気持ちを沈めるように言ってから、真紀の二の腕に指でリズムを刻むと口ずさんだ。

『カサブランカ・ダンディ』より抜粋

作詞 阿久悠 作曲 大野克夫

ボギー ボギー

あんたの時代はよかった

男がピカピカの気障でいられた

ボギー ボギー

あんたの時代はよかった

満席状態にもかかわらず程好い会話の波が寄せては返している『こはる』の一流クラブならではの雰囲気の中で、人気男優が色気のある低音で口ずさむ歌は、隣席には邪魔にならない加減で、同席者たちの耳にさざ波のように届いていった。

月の花挽歌 ～10. 月山^{がつざん}～

10-3

「話が長くなりましたが、ボギーはハンフリー・ボガードのニックネームです。彼の役を演じられるのなら、今からタイムスリップしてでもやりたいですよ！」と歌い終わった人気男優は嫌味にならないように、横田の顔をまっすぐ見てそう伝えた。

横田は曖昧に頷いて見せたが、視界の真ん中で心持ち男にしなだれかかる真紀の形姿を嫉妬心まるごとで感じ取っていた。

短い沈黙が流れた。

「素人考えかもしれませんが、先ほど映画俳優の演技力の評価についてTさんが言われたことで——作品の登場人物にキャスティングがハマるかハマらないか次第だとすると、運と偶然が大きく作用するんですね」と横田は今にも崩れ落ちそうな心境を持ち前のプライドの高さで奮い立たせて口を開いた。

「おっしゃる通りです。もし夢がかなうとしたら、『エデンの東』のジェームズ・ディーン、『アラビアのロレンス』のピーター・オトゥール、『ゴッドファーザー』のアル・パチーノなどを演じてみたいと思います。もちろん、『カサブランカ』のボギーもです。ところで横田先生、人生も運と偶然ではないですか？」と長身の人気男優は、とてつもない空想をドヤ顔で言って、左手を真紀の二の腕に置いたままシャンパングラスを決めポーズで掲げてから飲み干した。

「私だったら、『俺たちに明日はない』のフェイ・ダナウェイ……」と脱ぎっぷりのいい女優が遊戯感覚で相乗りするのを制するかのよう、「お二人とも元気があって羨ましいわ。ところでキャスティング・ディレクターってご存知かしら？」と大女優Kは小さく笑いながらも冷やかな声で言った。

「キャスティング専門の監督なんているのかしら？」と脱ぎっぷりのいい女優は真剣な眼差しをKに向けて尋ねた。

「ハリウッド映画の『ラストサムライ』はご覧になりましたか？」とKは訊いた。

「渡辺謙さんが出演された——、あれは三年位前ですよ。まだ観ていません」

「観ましたよ。謙さん、ハマってました！ゴールデングローブ賞とアカデミー賞で助演男優賞にノミネートされた時は、私も興奮しました」と人気男優は観るのは当たり前だとばかりに言った。

大御所男優Tもこくりと頷いて見せた。

「奈良橋陽子さんはご存知かしら？」とKは疑っているような表情を浮かべて二人の男優に訊いた。

月の花挽歌 ～10. 月山^{がつざん}～

10-4

顔を見合わせた二人の男優は互いにきまり悪そうに首を振った。

「キャスティング・ディレクターとして、渡辺謙や真田広之や菊地凛子などをハリウッド映画に送り込んできた人なの。彼女の名言によれば、役と役者の魅力が噛み合うと、化学反応が起きるそうよ。とにかく一言では語れないチャーミングな女性です。近いうちに紹介します」とKは言って、この場の話題にまつわる勘所をいつの間にか、さらっていた。

「恥ずかしながら、業界にどっぷり浸かり過ぎて、肝心なことを見落としていました。なんたってハリウッド映画だよ！すぐにでもその方にお会いしたいなあ。君たちもそうだろう」とTらしい物言いで、同伴の男優と女優に同意を強要した。

「でも、私たちはオファーをもらったことがなかったことも、彼女の存在を知らない理由の一つになりませんか」と女優は言って、自嘲気味に笑った。

「それはそうだけれども、その時のシナリオや監督との会話を手がかりに、ピンときた人を選ぶわけだから、我々の顔が浮かんだとしても、語学力も含めて彼女のイメージにそぐわなければ仕方がないよね。一度お会いして印象づけておくことも必要じゃないかな」と男優は野心をのぞかせて前向きに言った。

横田はTが指摘したように自分が『カサブランカ』にまつわる話をなまじっかしたせいで、予想外の映画談議になったことに困憊していた。あまつさえ、自分らしくないよそ行きの言葉遣いも相まって、酔いが暴走し始めていた。

タクシーを呼んでもらった方が良いと壊れる寸前で自覚した横田は、声掛けしようとした真紀が身を振りながら人気男優の左手を着物の上前の膝に誘導するところを目の当たりにしてしまった。

いかに高級クラブであっても、お客のスケベな行為をホステスがさり気なく対応することは珍しくないはずなのだが、この時の横田には通用しなかった。

「おい、二枚目は何をしてもいいのか！」と横田は声高に叫びながら、テーブルの上に乗ると人気男優に飛び掛かって殴ろうとした。

同席者はもとより、近くの席の誰彼なしに何が起こったのか瞬時に判断できなかった。

割れたシャンパングラスが飛び散り、驚愕する者たちは、横田の振りかざした手首を凄みを利かせた形相で掴んでいる男優を垣間見ることになった。

10-5

**銀座一流クラブで
有名日本画家が取っ組み合い！**

2006年12月15日（金曜日）から21日（木曜日）まで掲載されていた週刊誌Bの中吊り広告。全体の3番目の文字サイズで赤地に白抜きキャッチコピー。

発行部数で一二をを争う週刊誌にスクープされた銀座で数店にしか冠されないAランクのクラブ『こはる』での揉め事は、関わった人たちのせいもあり、マスメディアの格好の餌食になった。

有象無象のレポーターや雑誌記者等が開店前の『こはる』の近辺に張り込んだりウロチョロしてKビルに入っているテナント関係者に迷惑をかけていた。

とりわけ午前8時半開店の1階にある令子さんの花屋『フラワーベッド』では、1本500円のバラを1本だけ買って、探りを入れる者をはじめとして、不釣り合いな連中が出入りするので、営業妨害も甚だしかった。

そんな中でも、令子さんは嫌な顔も見せずに、大女優Kへのフォローアップも怠りなかった。

大御所男優Tは、「いろんな輩が大勢押しかけて来てくれたおかげで、新作映画の前宣伝にもなったよ。それにしても、あいつは男の風上にもおけないな。家内には横田君の作品を処分するように言い含めておいた」と電話の向こうで言ってから高笑いをした。

記事内容では被害者になる長身の人気男優と脱ぎっぷりのいい女優は、事態の成り行きからして、『人情紙風船』にキャスティングされることになった。

真紀は荒れ狂う海に船出ですのような覚悟で、通常通り店を開けた。

1年の内で特に忙しい年末にキャンセルが続出するだろうと予測していたが、しばらく遠ざかっていた客から予約の問い合わせがあったりして、多忙を極めた。真紀はゴシップの不可思議な魔力を改めて実感させられた。

当夜、横田は築地警察署4丁目交番で事情聴取をされるところを、駆け付けた真紀の口添えで穏便に済ませることができた。

正気に戻っていた横田は、土壇場での真紀の言動に心を打たれたが、なすすべもなく佇立していた。

後日、速やかに真紀は弁護士を通して、横田の未払金その他一切合切と引き換えに2点の裸婦画を貰うことで決まりをつけた。

月の花挽歌 ～10. 月山^{がつざん}～

10-6

お客様各位

『小春』年末年始のお知らせ
平素は格別のお引き立てを賜り、
誠にありがとうございます。

12月29日(金)～1月8日(月)迄
年末年始休業とさせていただきます。
本年もご愛顧ありがとうございました。
来年も何卒よろしくお願い申し上げます。
よいお年をお迎えください。

11月末からスタッフ達と手分けして書いていた5000枚近くの年賀状も投函締切日に間に合った。小事が大事を生んでしまった日に来店されていた80数名のお客には、お詫びの一文を入れることも忘れなかった。

2006年大晦日(日曜日)快晴の午前11時過ぎに真紀の運転するブリリアントレッドボディのオーディTTクーペA3は冬の陽を浴びて、西銀座JCTから首都高速都心環状線に乗った。

真紀の故郷山形県西村山郡西川町に行くには、山形自動車道の月山ICの一つ手前の西川IC迄の約4時間半のドライブになる。

7年前の6月に営まれた父の三回忌以来の帰郷になる。

この年、東京の年末までの5日間は晴天が続き、故郷西川町も雨模様と晴れの天候だった。天気予報では年始の数日間は降雪の心配もなかった。

冬季ならなおの事、新幹線で山形駅まで行きタクシーを拾えば訳もなかったけれど、敢えて車で行くことに決めた真紀の心情は、気象条件もさることながら、一人きりの空間に身を置きながら帰郷の途に就きたいという強いノスタルジックな力が働いたからだった。

当然ながらスタッドレスタイヤを装備した上に、山の天気にも備えてタイヤチェーンも載せた。

渋滞を回避するために大晦日と決めたので、予測した通りスタートして30分ほどで首都高速川口線の川口JCTから東北自動車道に入ることができた。

今の気分でCDラックから選んできた何枚かの内、すでにディスクに挿入しておいた楽曲ミスター・チルドレンの6枚目のオリジナルアルバム『ボレロ』を再生した。

愛車の最先端カーオーディオシステムで帰郷する第一番に流すに相応しい楽曲は、ジェームス・テイラーのスタジオ・アルバム『オクトーバー・ロード』か、ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィルハーモニー管弦楽団のエドヴァルド・グリーグ作ピアノ協奏曲イ短調作品16にするか迷った末に、和モノを選択した。

月の花挽歌 ～10. ^{がつざん}月山～

10-7

真紀はあれこれの思いが去来するままに東北自動車道を走行していた。

静かな車内空間に流れるミスター・チルドレンのアルバム『ボレロ』の最後に収録されている12曲目“Tomorrow never knows (remix) ”の歌い終わりのフレーズ（心のまま僕は行くのさ誰も知る事のない明日へ）を真紀の聴覚が捉えてまもなく、オーディオTTクーペA3は鹿沼ICを通過していた。

真紀の実家は月山の麓にある人口5000人足らずの西川町で、出羽三山詣での行者宿の名残りととどめる旅館『D』を百年にわたり営んでいる。

月山で採れた山菜や川魚料理が有名で、客室は10部屋ばかりだが、それぞれに趣の異なる今昔の風情があり、行き届いたもてなしをするために20名で満室としていた。

現在の旅館『D』は、義母の朝子と異母弟の拓哉夫婦が切り盛りしている。

一人っ子の真紀が小学校5年の時に、母の登紀子は乳癌で亡くなった。

父の正雄は登紀子の三回忌が済んで、半年後に5歳年下の朝子と再婚した。

今年で24歳になる異母弟拓哉も一人っ子だったせいか、年の差はあったけれど実弟同然に接してきたし、義母の朝子は真っ直ぐな性格だったので、真紀は居心地の悪さを感じたことは少なかった。

親類も人並みにいたが、ほとんどが山形県内に在住していたので冠婚葬祭で顔を合わす程度の付き合いになっていた。

国見SAでトイレ休憩を取ったきり、真紀は走行を続けた。15時過ぎに村田JCTから山形自動車道へ入り一時間ほどハンドルを握ると、寒河江川（さがえがわ）を渡り月山湖上の西川ICに到着した。

雪化粧の月山が出迎えてくれたのは、7年ぶりの故郷だった。

旅館から少し離れた場所にある2階建ての仕舞屋風の庭先駐車場へ愛車を止めた時は、午後4時を回っていた。

アフターアイドリングをさせながら外に出た真紀は、見慣れた景色と冬の冷気を吸いながら、思いっきり背伸びをした。

旅館は16時からがチェックインタイムなので、誰も来ないと思っていたのだが、「お姉さん！」と義妹の奈美恵が声高に言いながら小走りやって来た。奈美恵とは仙台のホテルの披露宴で花嫁姿を見て以来、4年ぶりの再会だった。

月の花挽歌 ～10. 月山^{がつざん}～

10-8

奈美恵はすっかり若女将然としていて、通りすがりなら、まったくわからなかった。

幼少期から使っていた2階の東側にある突き当りの部屋へ、奈美恵に手伝ってもらい荷物を運び入れた。

程好く暖房が効いている6畳の部屋は、義母の気配りのおかげで、いつ帰省しても変わらず待っていてくれた。

近頃は、ホテルや旅館で年越しをする家族が増えているらしく、旅館『D』も同様だったので、奈美子に現場に戻るように促した。

独りになってしまうと、近くを寒河江川が流れる昔ながらの生家は、その広さ故に静まり返っていた。

真紀は一階の仏間に行くと、3日前に『フラワーベッド』で作ってもらった仏花を仏壇に供えたと合掌して無沙汰を詫びた。

58歳の時に、くも膜下出血で早死した父の朝雄は、仙台の大学を卒業後、大手ゼネコンの東北支店で営業マンをしていたが、入社2年目、番頭夫婦に任せていた旅館『D』の経営が思わしくなくなり、紆余曲折を経て六代目を継ぐことになった。

学生の頃の朝雄は大学のチェスサークルでは飽き足らず、国際チェス連盟公認の『仙台チェスクラブ』に入会するほどチェスの魅力に引き込まれていた。

やむを得ず家業を継ぐことになり、若女将として申し分のない嫁ももらい、経営を軌道に乗せると、眠らせていた血が騒ぎだし、暇を見つけては高速で1時間で行ける『仙台チェスクラブ』へ顔を出すようになった。

幼稚園の頃から愛娘の頭の良さを見抜いていた父は、チェスの手解きをするとともに、『仙台チェスクラブ』へも連れていった。

チェス駒のフォルムとルールに興味を持った真紀は、みるみるうちに上達した。

薄暮の迫る仏間は静謐としていた。

真紀の脳裏に躰には厳しかった母の面影が過ると、すぐに父の穏やかな表情が立ち現れて、チェス盤を前に沈思黙考している。

真紀が中学1年の夏休みに月山の夏スキーから帰ってくると、井戸で冷やしておいた西瓜を切ってくれた父が、いつもと違う空気感でチェスを所望してきた。

対局の終盤になったところで、「再婚しても構わないかな……」と父はクイーンの駒を持ったまま、真紀を案じるような面差しでボソツと言った。

「……お父さんの好きにしてください」と察しがいい真紀はさらりと答えてから、クイーンに向かってウインクをした。

「ありがとう。お母さんの三回忌が済んでからにしたいと思っている」

その夏の日のチェスは、娘が初めて父に勝った感慨深い日となった。